



Title	大阪の復権を考える
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1980, 32, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86094
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪の復権を考える

財団法人大阪防疫協会

理事長 辻 野 直二郎

(一) 適塾と近代日本への礎

緒方洪庵によって創立された蘭学塾（私塾）適々斎塾（適塾）は、その主標を蘭、医学の研修としながら、オランダ語を通じて西洋文化の修得にあつたことは、適塾に学んだ多くの逸材の続出によつても明らかであるばかりでなく、明治維新の興隆に寄与貢献したことは大であり、歴史の証明するところである。

この点において、浪速の地に生を享ける人々は先人の偉業を偲び、さらに大阪に活力を取戻すためにもこの際先人の築いた偉業に思いを新たにして、府民協力一大奮起を致したいものである。

緒方洪庵と適塾の推移

適塾は大阪市東区北浜三丁目三〇番地所在、史跡、重要文化財である。

最初一八三八（天保九）瓦町に私塾（官学に対し）として開き、

次いで一八四三（天保一四）過書町の町家であった現在地に移つた。建物木造一部二階建、建

昭和五十一年十一月文化庁が工費一億二千万円（解体・修復工事費）にて着手五十五年五月十九日完工式を行つた。

緒方洪庵略歴
時代江戸末期（自一八六一～一八六三（文化久三））

備中足守の人（現岡山市）名、章字公裁、洪庵と号す江戸末期の蘭学者

1. 十七才の時医学を志し大阪に出て中天遊の門に入る。

2. 二十二才の時江戸に行き坪井信道、宇田川玄真らにつき蘭学を修む。

3. 二十九才の時（一八三八）大阪に帰り医業に従事、傍ら蘭学塾（適塾）を開く。

4. 一八六二（文久二）江戸幕府の奥医師兼西洋医学所頭の功をうけた。

5. 著書の訳、扶氏医戒の略

6. ドイツ医ベルリン大学教授フリードリッヒ・ラントの

7. 「蘭学」の「呼称」の始め

8. 官学（塾）は一部のすぐれた指導者によって自ら信ずる学派或いは流派を自己の努力、経営又は町人らの援助のもとに行つた

一人の為に生活して己のため生活せざるを医業の本体とす安逸を思ひげ名利を顧みず唯おのれをすてて人を救はんことを希望することのあらず

以下十一ヶ条省略

佐野常民 日本赤十字社初代社長 大鳥圭介

蘭学発展の経過
蘭学草創の経過を大観玄沢（一七五七、宝曆七一八二七、文政一〇）江戸中期の蘭学者

が次のように語っている。

「白石新井先生に草創され昆陽青木先生に中興し蘭化前野先生に休明し講義杉田先生（註四）に隆盛す」と明言している。その大槻は杉田、前野に学びさらに長崎に遊んで本吉吉雄らの通詞（通訳）に從学して「蘭学楷梯」をあらわしてオランダ語の文法的學習の道を開き「解体新書」を修訂して「重解体新書」を刊行、また家塾「芝蘭堂」を開き多くの門人を養成し橋本宗吉、宇田川玄真、稻村三泊、山村昌永、小石元俊ら全国に及び蘭学の主流をなすに至った。

江戸時代の一六一五（元和元）頃からオランダ語を通じて行なわれた西洋諸科学、特に医学はその中心をなしたもので西洋事情に関する研究、知識を吸収した。その内容は医学、本草学、天文曆学、物理化学、地理学などあらゆる部門にわたつていた。

十七世紀初めには、オランダと島（註二）を拠点とするオランダ商館の門戸を通じて、オランダ人医師によつて文化、學術

特に医学が急速にその道を開かれるに至つた。徳川吉宗の時代にはいつて、幕府権力の擁護策として、オランダ商人を通じて西洋の知識を得ようとし、自然

科学の奨励、施設の特徴であつた殖産興業などを重視し蘭学の発展に影響を及ぼした。

「蘭学」の「呼称」の始め

官学（塾）は一部のすぐれた指導者によって自ら信ずる学派或いは流派を自己の努力、経営又は町人らの援助のもとに行つた

学問、教育の場所であると解す

りこの記述の過程において自分達の成果を「蘭学」と呼んだ。これが「蘭学」名称の始まりであると伝承されている。

蘭学の素地

江戸時代の一六一五（元和元）頃からオランダ語を通じて行なわれた西洋諸科学、特に医学は

その中心をなしたもので西洋事情に関する研究、知識を吸収した。その内容は医学、本草学、天文曆学、物理化学、地理学などあらゆる部門にわたつていた。

十七世紀初めには、オランダと島（註二）を拠点とするオランダ商館の門戸を通じて、オランダ人医師によつて文化、學術

特に医学が急速にその道を開かれるに至つた。徳川吉宗の時代にはいつて、幕府権力の擁護策として、オランダ商人を通じて西洋の知識を得ようとし、自然

科学の奨励、施設の特徴であつた殖産興業などを重視し蘭学の発展に影響を及ぼした。

「蘭学」の「呼称」の始め

官学（塾）は一部のすぐれた指導者によって自ら信ずる学派或いは流派を自己の努力、経営又は町人らの援助のもとに行つた

学問、教育の場所であると解す

面積二八五m²延面積四一七m²

昭和五十一年十一月文化庁が工費一億二千万円（解体・修復工事費）にて着手五十五年五月十九日完工式を行つた。
緒方洪庵略歴
時代江戸末期（自一八六一～一八六三（文化久三））
備中足守の人（現岡山市）名、章字公裁、洪庵と号す江戸末期の蘭学者
1. 十七才の時医学を志し大阪に出て中天遊の門に入る。
2. 二十二才の時江戸に行き坪井信道、宇田川玄真らにつき蘭学を修む。
3. 二十九才の時（天保九）大阪に帰り医業に従事、傍ら蘭学塾（適塾）を開く。
4. 一八六二（文久二）江戸幕府の奥医師兼西洋医学所頭の功をうけた。
5. 著書の訳、扶氏医戒の略
6. ドイツ医ベルリン大学教授フリードリッヒ・ラントの

7. 「蘭学」の「呼称」の始め

8. 官学（塾）は一部のすぐれた指導者によって自ら信ずる学派或いは流派を自己の努力、経営又は町人らの援助のもとに行つた

学問、教育の場所であると解す

村田藏六（後の大村益次郎

人材によるものである。

一二ヶ条に分つ、その一

ふくて人の生命を保全し人の疾病を復治し人の志苦を寛解するの外他事あることのあらず

江戸時代の一六一五（元和元）頃からオランダ語を通じて行なわれた西洋諸科学、特に医学はその中心をなしたもので西洋事情に関する研究、知識を吸収した。その内容は医学、本草学、天文曆学、物理化学、地理学などあらゆる部門にわたつていた。

十七世紀初めには、オランダと島（註二）を拠点とするオランダ商館の門戸を通じて、オランダ人医師によつて文化、學術

特に医学が急速にその道を開かれるに至つた。徳川吉宗の時代にはいつて、幕府権力の擁護策として、オランダ商人を通じて西洋の知識を得ようとし、自然

科学の奨励、施設の特徴であつた殖産興業などを重視し蘭学の発展に影響を及ぼした。

「蘭学」の「呼称」の始め

官学（塾）は一部のすぐれた指導者によって自ら信ずる学派或いは流派を自己の努力、経営又は町人らの援助のもとに行つた

学問、教育の場所であると解す

江戸時代の一六一五（元和元）頃からオランダ語を通じて行なわれた西洋諸科学、特に医学はその中心をなしたもので西洋事情に関する研究、知識を吸収した。その内容は医学、本草学、天文曆学、物理化学、地理学などあらゆる部門にわたつていた

べきか。

緒方洪庵の設立した「適塾」は、當時浪速の豪商、天王寺屋五兵衛（註一）の財政的援助を受けたものである。その学習方法の特色は、塾生達の自己批判即ちその日その日の進歩の状況に応じて席次の入替、抜擢が厳に行なわれるという徹底した教育が行なわれ、塾生達の向學心をかいたるものである。

このようにして、浪速の一角落所在する適塾の存在は、明治維新への「夜明け前の日本」近代日本国への礎を創りあげたものと評価するも過言に失することなく、その功績は永遠に明星の如く輝く金字塔であると共に、吾等後続の浪速人の誇りでもあり、有形無形の資産でもあり、長くこの精神は保持されなければならぬと思う。

（二）大阪城築城四〇〇年
一九八三年昭和五十八年は日本民族にとって、また私達大阪に

緒方洪庵略歴

一八一〇年文化七年四月四日 備中、足守、現岡山県

一八二六年文政九年七月 大阪、中天遊の門に入る（一七才）

一八三一年天保二年二月 蘭学坪井信道の門に入る（二二才）

一八三六年天保七年二月 長崎へ蘭学修業のため赴く（二七才）

一八三八年天保九年一月 大坂（二九才）に蘭学塾適塾を開く（二九才）

九年七月 摂津国名塩（兵庫県）の億川百記女八重と結婚す。葬る。遺骸は大坂滿龍海寺に納める。その他参考書町の町家（一五）

一八四三年天保一四年一二月一五日

昭和五八年五月一日

（一五）

</